

基盤教育機構

キーワード

歴史言語学、語彙意味論、項構造構文、構文交替、前置詞、用法基盤モデル



教授 / 修士 (文学)

入学 直哉

Naoya Nyugaku

学歴

京都外国語大学大学院外国語学研究科英米語学専攻修士課程修了
甲南大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士後期課程単位取得満期退学

経歴

大阪大学大学教育実践センター非常勤講師、富山大学芸術文化学部非常勤講師、
甲南大学文学部非常勤講師、Medalio Placheta賞(2011年)

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

英語の歴史、言語論、言語と認知、最新の言語理論を応用した英文法・語彙教育

メールアドレス

nyny@fukui-ut.ac.jp



主な研究と特徴

「構文交替に関する意味論的研究」

構文交替に関する研究は与格交替や所格交替を中心に特に1990年代以降、生成文法、語彙意味論、認知文法など様々な理論的枠組みで活発に議論されてきた。本研究では(1)-(3)のようなclearに代表される除去動詞の交替現象を扱う。

- (1) a. Henry cleared dishes from the table.
b. Henry cleared the table of dishes.
- (2) a. The thief stole the painting from the museum.
b. *The thief stole the museum of the painting.
- (3) a. *The doctor cured pneumonia from Pat.
b. The doctor cured Pat of pneumonia.

このタイプの動詞は「所格交替を行う動詞(=(1))」「所格交替を行わない動詞(from前置詞構文のみ)=(2))」「所格交替を行わない動詞(of前置詞構文のみ)=(3))」に分けられる。本研究の目的は(1)のような交替形を意味論的に分析し、from前置詞構文とof前置詞構文の本質的な相違を明らかにすることと、cureタイプの非交替動詞が交替する用例をコーパスを用いて量的に分析し、そのような例外的構造が生成されるメカニズムを解明することにある。

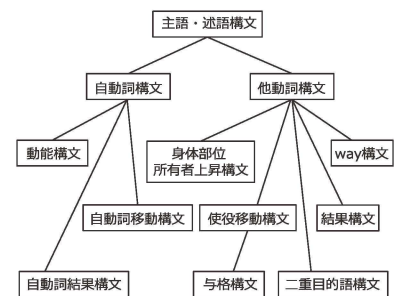


図1. 項構造構文のタクソノミー

「構文化に関する歴史言語学的研究」

奪取動詞robの補部構造は(4a)に示す通り、直接目的語に被奪取者を表す名詞句を取り、被奪取物をof前置詞句で標示する。

- (4) a. Jesse robbed the rich of all their money.
b. *Jesse robbed a million dollars from the rich.

現代英語の観点からすると(4a)は形式と意味のミスマッチが生じており、また前置詞ofの出現に関しても妥当な説明を与えるのが困難である。

古英語においては奪取動詞は二種類の二重目的語構文を取っていた。一つは対格名詞と属格名詞を目的語に取る場合であり、もう一つは与格名詞と対格名詞を目的語に取る場合である。中英語期に前者はof前置詞構文へ、後者はfrom前置詞構文へ発達した。この統語形式の変化は(5)-(6)のように示すことができる。

- (5) NP1 V NP2(ACC) NP3(GEN) → NP1 V NP2 of NP3
- (6) NP1 V NP2(DAT) NP3(ACC) → NP1 V NP3 from NP2

動詞robは中英語期にフランス語から英語に借入された語であるが、その際、古英語の奪取動詞の統語構造に由来する「NP1 V NP2 of NP3」構造を選択したと考えられる。

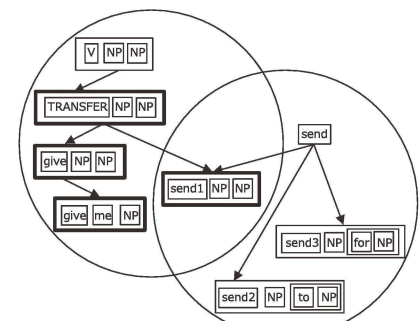


図2. 二重目的語構文のネットワーク (Langacker 2000:34)

今後の展望

与格交替、所格交替に代表される構文交替に関する研究は1990年代に隆盛となり、その後も国内外で研究が継続されている。しかしながら、構文研究の多くは現代英語のデータを対象としており、構文の変化を歴史的に分析することにはほとんど関心が払われてこなかった。また所格交替に関してはloadやsprayの分析が中心であり、clearやemptyなどの除去動詞の研究はあまり行われていない。したがって、現代英語の除去動詞の項構造構文を歴史言語学的に捉え直すことは新たな知見の発掘へつながる可能性を秘めている。

また非交替動詞が交替するような事象に関しても現状ではほとんど研究が進んでいない。例えば、(4b)は非文であるが、コーパス上ではrobがfrom前置詞句と共に起る例が観察される。このような一見すると例外現象として処理される構文交替を詳細に分析することで構文研究に新たな貢献ができると考える。

現在はclearタイプの動詞の交替現象を扱っているが、今後の研究としては以下の(7)のような身体部位所有者上昇構文における交替形にも取り組む予定である。

- (7) a. Bill hit John in the head.
b. Bill hit John's head.

所属学会

日本言語学会会員 (平成22年～現在まで)
日本英語学会会員 (平成17年～現在まで)
日本歴史言語学会会員 (平成28年～現在まで)
近代英語協会会員 (平成9年～現在まで)
英語語法文法学会会員 (平成29年～現在まで)

主要論文・著書

入学直哉 (1999) 「語彙意味論と古英語受動構造」『甲南英文学』第14号、pp.65-78.

森山智浩、入学直哉他 (2010) 『英語前置詞の概念—認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化の学際的観点から—』ブイツーソリューション

入学直哉 (2019) 「動詞robの補部構造に関する通時的考察」『福井工業大学研究紀要』第49号、pp.208-215.